羣書類從

三百七十九上

和書門 類
九五九五 號
二〇四 函
架
六七〇 冊

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
二一四 函
三九 架

内閣文庫
番號	和	9595
冊數	670 (471)	
函號	214	39

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第三百七十九上

検校保己一集

合戦部十一

豊鑑

室町前乃家はうけ次その末てせゆくさ海もある
ゑなきさおもひつゝ露八玉となさむもあやうき遠近
く見出しつるに破却の年月をおほえぬ方
よわきこくほとくしてこそ侍るなれときこし語りし給へと
いなりしと代々在所をはおかれけるなかさしあらしくて
侍なるもあるよしを近き時まし織田上総介信長

さうせ斯波兵衛乃家にありしかれとさすかに尾張國に
なり出後ましく彼越前をおさへ美濃なとおかすと
りゆきて終にみちかき國々を掌ににきり右大臣
まてなり昇りて當家の後見し給ひハ後家良
ぼしく給ひけれはその一生を信長記とやさてあとは
なかなかにみちぬる物あまたしも実ともおもひえぬものなりしハ
あさちや信長の三太郎信忠とともに明智日向守光秀か為に討れ
給ひし後羽柴氏秀吉立かゝりて日本をおさめくまゝにまゝ
にせうしまけりあら給へり関白まてなり昇りて三韓
の軍を渡し勢を唐まておそはせし事後の

多し物なりし中納言秀次ハ関白をゆつりて後
に八大閤とうやまはれしめのとる所ハ尾張の
出に生まれしか賤しき氏の子まてあまたしかくまて
なり出給ふなりしまて日本にも例なき人に傳説
か野に築きし家の後見なりし八幡の君もえも通ひ
しゆへなりし右大将源頼朝の九近人まておちは果
の後もなかりし八幡旗ゆへあまたなかほろひし人氏
まれうくあらはれしを例おほしかし此世のことハ見へし
豊臣のしまつのありさまなきと老の僻見をおもふ
なりえへし

豊鑑巻一

長濱ま砂

抑前殿下豊臣秀吉天文六年丁酉にうまれしの
ちすん関白にならせ給ふハ尾張国愛智郡中村
とかやにておの田氏家すかハ五十町計乾にて豊
しの民乃家よりの五六十ハおやおもん口乃はやし
乃民なる子なまし八父母の名もしられぬ志かうし一族
なとも志のなや二八許年比ひとり遠江の国
てさそらえけり松下氏石見守といふにつかへく
志かりしかしの思定まるや文かよの里よふ

帰りて尾張国の司く織田上総介平信長とまうし
いうぬきしてつかへんやとおもひけれしかくいふ
ものにつきても足ざるわなれはいふにもなくも
給へりし信長川道逍遥して御かけ給ふ道のほとら
くかてつかへんとおもふなるほとにて宮給へハ我なり一ツの
あんやいふ海ともあらはなりんとゆるし給ひ山は
かうて清洲に佐々木して御かたに参仕せり信長朝
とよ日毎に精を出し給ひて一日もおこたりなく皆
ほとなれとうちさくなりて私かほしきにし人に勝れ
めきて次第にあかりさしをハせたるまでと持て木下
給者

藤吉郎といひけるを信長の御ゆるしにて
しが柴田修理亮勝家丹羽越前守長秀をうらや
みて此二人が名字を一字づゝとりて
丹羽の羽と柴田の柴とをとりて羽柴筑前守と改
となり後すべて此人のことをも書して信長の縁あり
と伊勢の勢を加へりけるとかや永禄七年信
長美濃の国をせめて稲葉山の城をせめとり
井の口をあらためて岐阜と改めける
斎藤の美濃守義龍が孫龍興
興よりやぶれし國人みな背きて龍興は八

越前に走り給ひぬ永禄十一年正月信長近江国
へ軍を発し箕作の城を責落して秀吉を掛
城没落し敵を追て佐々木義賢の城
退き甲賀へ落しつ此時その座に[illegible]信長
都へ入て初て此国を知行をさせて[illegible]
又城築して信長都に入給へは諸大名も皆こぞり
給ふ人なるを背けり随ひ[illegible]
患て付[illegible]因患く信長[illegible]
保元より道衰え[illegible]の中し[illegible]次
平治の平相国清盛信頼義朝と亡し[illegible]

一門あまた司となり我身太政大臣に昇りて奢を極
めき法皇を鳥羽にこめ上下に礼をとらさりし
ゆゑに源頼朝彼一族をほろぼし日本の惣追捕使
となりぬ我四代をへずしていまだ頼家實朝まで
没しければ北条の義時後鳥羽の上皇を隠岐
の嶋へうつし人乃庭まて背きて科遁絶くお
捨まる時いかにして宗妃足利尊氏後醍
醐帝を南陽に押し私の乞まゝに将軍
鹿苑院太上皇を号しとし遂まし耳もふさし
後亀し當時孝謙帝を削り某太上皇へそふられ

ら守統九代の孫しは神慮をそむきけり
りてゆくそ名あらん人いつれかしせたるけらゝんや
明徳應仁より乱世にて時こそ織さし源義輝を好し
若くらまし其義昭織田の信長と方人として
殺さまへしかし信長と後亀らくありて毛利輝
元をとふらひ勢行強く足利の末家をつちはひ
織田の信長は其あふ頼ぐ横さんと皆に亡ん
まつなり阪本らの所に信長をうつし下の上を主ひ
久敷に五百年討ほろぼされ之文きんまを
筑前守秀吉いよいよ世人よみにてきたしきなりし

ますらをの前には元亀元年の夏江北
浅井備前守越前の朝倉義景と一心にして
信長に背きし故に軍を発しけれども失ひけん
とし給ひ羽柴筑前守秀吉先掛をさせ給ひ信長ゆるし
給ひて勝をとらせられしと給ひし又合せ給ひ程
なりぬれば美濃国の竹中氏牧村氏丸毛氏二人
と具をきれとこれを任せ給ひし時には後れをも
御伴して江北に軍をむけ先掛し給ひ同八月廿二
姉川の軍にて竹中氏久作某と討つ江北
のことにあつて浅井方には丸毛もとも浅井あまし

吉藤氏を討つことを仰せ付けられしに従ひて
まゐりて石見守小身なれども浅井が軍
朝倉が援兵と戦ひ破られ姉川小谷城に籠りて
のち天正元年八月信長又小谷の軍をよせ虎御前
山に軍をよせし給ひ浅井又越前への兵を
遣しけるに朝倉勢と合せけるを江北小谷に籠り
て軍力根山に陣取りしに信長掛向ひけるに
木越前の軍勢下に破れし命を失ひけるに
かくれて援く越前に乱入朝倉義景を討ちて
うちとりし後小浅井が城を攻めし同八月廿

八日備前守父子自害しぬそのほかの事も信長記に
あきらかなり浅井氏が知行所すべて筑前守
秀吉に給ひぬ同九月小谷の城にうつり給
ひ年をこえ翌明年天正二年の春小谷山は
さかしく高くしてよろしき所ならず
三里余いぬ井にありしを今浜といひて古き城あり
海にのぞみて高く広く往来の便よきとて
今信長の名を取て安土山にて移さるべきは
始めし此所をすむべしとて城をかまへ
をおほせられしよりのちにせられし長浜なれ

かはらにうつして長浜とあらため
其代まてもよりし長浜の北国の敵のつなぎ
されば人ゐうつりしといへどもさだまりて御城
十月播磨の国を信長より秀吉へ下し給ひて
国へ発向ぬ東播いみな降りしも中に小寺
官兵衛といふものありて西播佐用上
月の城をまもりしより彼筆事により軍議
向上月の城を落しまもらせんとていましめ
陣をなし返す上月の城をは山中鹿之助といふ
ものを居らしめつ江州みな人へ下知して年をへぬ

然る六年の春又播州の国に趣但馬同播二ケ国を
志つめんと出陣して播州加古川よりしはらく
別所小三郎と云武士東播磨をしる知家なれ
とも謀ありて三木と云所に城を構へしか安芸國
毛利右馬頭輝元をたのみけれハ秀吉すなはち
おし入これを申ほとあつかひとなりて然るま
世戦ひんと謀ありけれハ信長ハ彼城を責給て
しかも世めその中にいつくも彼よ又ん所とて掟
あらんとはかる民ともいひし書写山にて僧坊
もおほく根本中堂をはしめ彼寺の僧とも

とやらひゆきて陣所をこしめ信長の御陣へんまんと
もしと谷ゆきまいらせて書写山へ打あかりぬる僧
ともさわきけるに上へあかりて身をかくさんとしけ
れともひぬるを三ッ文字の寺僧すこしも殺すま
しく思ひ和寺をひらき一條院の御門永延二
年の頃性空上人此山をひらきつゝしの和尚と釈迦仏
おさめ居常共堂をも建立ありし法の花の道をひろめ
女人のたゝさへ済度ならせ仏もさそ浄土へ
うくめてらん天地の内武士はあたりにしたかふ人を
ものゝふを徒まして兵を忘るゝとも聖の御

代々はりられけるにそ理なきつくせしほとに又毛利
氏大江輝元吉川小早川なとゝいへる某ゝ太将として
備前美作の主宇喜田直家をかたらひ五六万
かほとの軍勢にて西播州に出上月の城を取陣
も圍ぬ處しぬ信長へ請かれし秀吉小寺氏なとも従
かくかひある書写山に軍をよせしけり一毛利家大将
なれハ城とりこしん其弟尤さしゝ秀吉より向ひ
鉄炮とはやかちにて備へ取きりつれ趣信長
中へ早馬をとうさせられ本郎城命信忠を大将
としてはしめ瀧川左近なとむかハれ信長

も出立給ハんとありしと此勢とも明石まてむかへ
急かりしあしくて高倉も表へハ行もやらひ剃信長
その御給ハんとも指くまても高倉とて退ていきる
むかえへしと信長にハ内ひとくはしらんれくるあ
いかさまにせ荒木か軍ハ此退陣ましきあれいは
かんとおもふかふとよハひ秀吉功あらんことを秘
さてうちにおひるせらとにもひの秘ねさくとてそ
おほやけとてもよもきこえさせきにほくほとさる
趣いまふあらんとかゝやけつさとにみなあらぬ
にへもしたん秀吉ハにもうして軍をまくしの其ひ

とよみくるんと思ひ給ひしかしく大塚陣取
浅くすれハ我兵くたりてハきんとかゝるへし哉
時毛利家の軍より野伏をよせかくる事あらハ下
知と討ぬましく秀吉の若ものとも出あひ入
かり合て野伏共を又討かへり毛利家よりかくも
又ひかりまうけから秀吉ハ軍より尾藤氏戸田氏軍
いふかのえん掛武をうひつ中村氏献より随あり
木下氏合と先をひめ彼も是も名氏あつくいへ籠
けり〳〵く軍ハとよらて秀吉ハ軍をあやうき
んとせんかりなりて竹中某下知とましてその用え

ましまくうひと上り退陣してあひ信長へ申
候ありしかはかるゝ金山と退て書写山
に陣とり姫路の城中へ入後勢を待て静しおかく
返ぬましくきんとまもなく毛利家ニ和談請けり
ぬほ佐中国らと川ゆそらいふともなるかけるかなん
秀吉ゆへ信忠のかゝへゆさらくしと也上月表
へ旗をよせさせ給ひて毛利家の根をとゝめて
とかせ中国施せまくも信長の御心にはまゝる
ゆし秀吉も数まてつとめぬ身なりしハともあるらん
くわれ鹿の城をせさせ給ひしハ西國のそて

まもる御名をおとし給ふへからすと篠原ら
いさめしかとも今ハ志をあらためへきとも見えされは
いさかひ給ひしなれハ信忠も安からす思ひ給ひて
させて三木へ寄せてハよせめにして軍兵を多く入らせ
よしやれ給ふへし六月末日に大塚と三木の内城所
かうし廻りに此三みの城郭を取秀吉ハ居給ひけん
取ち平山とて乾なりおもむきけるか陣取りて
をさらし置秀吉に渡し信忠帰陣し給ふ又秀
吉ハ城の外ハ鍬かけのあらけたるに十月末つかた
三木より軍兵を出して正平ちかつるを中村孫平

次よまのうけへとりて同城より寄せ来る秀吉も出て
軍兵けしからす中村のしるしを城より打出て秀吉
軍ふうて居給ふ人陣を破らんと能登して次
又と交へ一番乃備の陣城にかかりて競掛
し城次乃陣秀吉是非ふ及て陣ちを秀長備ふ
けれとも敵のへに続きけれハ直追
ちりちりに別所弟小八郎宗次か本城
し雲ある武士共四人にて外手くりくりと城
かなへ引返てしよ入られにけり
天正七年の春古田吉左衛門尉神子田半左衛門尉中

西孫四作るとて守し向城にありけるを二またの
夜粮をもち運ひて城へ入んとせしに此二人
の者ともおひ入させしと聞しかは石野越中
か射たる矢にて吉田吉兵衛あたりてうたれぬ
取か兵とも頭餘多なりけれは三木に引
て軍はやみぬ三月初つかた三木の向城を築れ
て近くよせんとて城より信忠兵餘多引つれ
播州へくたり向城ともを近くつくりて大勢をおかれ
城中よりも出あひしか程もなくて城へ帰り
は如此て秀吉はこゝまて入道四月末つかた信忠

帰り給ひぬ秀吉はさき程まて付そへおかれけり
きくて三ひ給ひし此中にも都の例をならひたるや
らしと菓子なと出る人のそこに花見れは語なるへし
て京へくたれは其人見ゆきて来るにはかに女
様なれとも程なくおもひいて枕をかはしけれは播州
そて死なんとて軍場を命と思ひ次に因りし
しとていまゝてもなく秀吉御施し年山に
給て六月中の比給へ来りしに秀吉治り
ぬくらせひ劉禅孔明と見しこゝろす
それと城は但しま弱なりし給へるにそなりける

ん同十月十日城よりも軍を出して吉大膳か
ましく向城へくはせ息をもつかせす戦ひ大
膳をうちまけよるに秀吉やかて平山よりはせきて
くりんとまわりて大膳をうちとらんとひしめき
とりまきて掛合戦しけれは別所か兵一軍
に及はれけれはさらまして終を退けは討しかは別
所かうちの正兵衛一族郎等二百六拾余人命を失
ひけれは城中弱りはてて今は軍もなく撫
おもて籠城三めくりけれは寄手はかかりて人数のひかる
色もなくしていくれぬ天正八年正月十日旅か先

顔して別所か二千くさりて思付式如右かもれとかく
秀吉よりまくりて還り別所へ戦かまへて城を受とる
様をまして正月十七日小三郎長治自害しぬ伯
父山城守家しく火をつけ腹をきって切て煙となり
なわぬ別所か一族悉く秀吉三年公を襟しめて
とらへし播州国中にかかるさふらひの家のなかに
く婦女子やつて三木の城を比附家を没落て
ともかくもすさともをくさ所にて定めかたく京寺
友云備中しは此所を播州をよりていかつくさ
あり戦をもみゆる姫路に移り国の中心として

毎の便もよし此国をとらん人は此所にてよ
ろしかれ姫路よりつゝき便路よくおもひさらに
いひあはして秀吉聞しめしてさもあらんと思ひ給
ひけれは姫路よりいつれの但馬の事
りしき給ひしよ此おりまて戦つき便もな
きましたみなちりてひつきぬかしの谷とかやり
野伏とも集りありしとかく討死す義清も秀
吉と国あり里とおほしき播州の国をゆつり給ひぬ
西播州広瀬といふ所に宇野民部と云者城を
持ち秀吉にしたかはさりしを兵糧攻し是を

かこみ給ふその時連判の名有者給也とかくに
ましておほし発向なし
くらり出まて鶴井首みな広瀬うれ
わすれしひ給ひぬ然は秀吉おほへしあつて
宇野はしれもやすくあん城抜あ西
国の事さておもしろと若木平大夫追かけ道よ
く河西給ひぬをあら因幡国にうち越山名禅
高の事へし馬の者とうてまんしかし給ひ後
は山名乃末ゐなくしてありしを然かあつて此のふと
毛利輝元のとき比加て守らをうはは山名家を

秀吉ハ御さしありて城ハ損むくれしと見切
うちとらんは骨のをれまし城をほしてやかて破るへく
され共粮のはこひ入んを絶へしとて城の廻りにさく
を結屏をめくらして城の外へ出る者は捕られけれ
多く戦へる者もありて日を送り月を越し程
に粮つきてける牛馬は殺し喰しかとも後はれ
もほとなくつきぬれは餓死し人民まてむさと切食
あへりき類の近きをしてきるよはあたへて子
は親を食し子ハこれを食しけるとしる有様
いふも中々なる漢朝の世の乱れに赤眉の賊らかを

人を食しと傳へきく斯るためしは我朝にもありけるかし
やさあはれなりし儀なり軍勢に事ハいはせ学く
もとく孔夫子の道しをきくに仁なる判官とし
経家は城主は宗徒の者なれは腹切命を失へし
数まてそはぬ者なれは御助なし候れ免されは
よと申しかはゆるして宗徒の者斗自害し諸
きる人みな物ていかにも久食を断しと秀吉憐
大なる釜を居させ粥を煮させてさまし候ぬるを
行る者にも食せさせしに然し文急也多く
食し者ハ忽に死ぬ少喰しハ恙なかりてたんとく

しくらしけん赤松善祥をかゝて城はまもりしを
因幡國の境を押領せさせ情ふく帰りまゐらせ労かれ
ぬきあつされ軍をよにつかれし兵志ひしかはこれを
ゐくさひるし手をも紫田天正九年のこ播
州の姫路と云所に秀吉住つき城かまへられしに此
所を小寺友か請ふへしく住し城國の中の人
多なんとかへきかたまつしいよ程小なる民退き秀
吉よりまれは城も石をうしろそて山城作りみ地城
ららくれをたてへやうとらもわすき造りつる
天をとらやとて家を継ひゆゑてあるしそひかし

同しれまへさしめしくゆうさるひつの歌をとまよへまゐ
人中い
住をう又香住へさる砂の松の下にむひそ為て古るる
かいやられ事まて又くよれ労

高松

天正十年の春毛利輝元をとし備中へきよし
信長に申されけるにいさき向給ひし信長卿より
總くとゆひとおさへし檢く播州但馬因幡三の
國の兵を引具し備中へ越え給ひし路次にてのくに
の備前美作の守宇喜多の古家こそ秀吉にしひ

さいわと合ぬれハ敵とも見え掛りして出張へ毛利
輝元ハ本ハ周防大江廣元か末にて安芸国
吉田といへる所の主なりしか輝元か父
元就さかしき武士にて敵ともに随ひ機なりに
今まて輝元か知行の国備中伯耆を境とし
西ハ長門を限りて備中の高松といふ城に
堅(?)して守らしむ秀吉の軍備中国へ向ひしとき
塚か元田か城なといふ小城を附て吾か兵破りて高松
の城へよせ圍む秀吉城を見給ふに二方ハ山近く
川谷ありその川をせきとめ二方卅余丁に堤を

築きてとゝめて城内中に流入れて水かさ
すみ色となりしかハ敵ハ陣を築く堤を流るる
保ちかぬるのみにて城中海のことくなり城中
の家ハ水底となりぬれハ人々ハ梢にものをも
たてゝ集りゐたり詮方なけれハ水をもふせくへき
やうもなくわれ先に戦へき便もなく
城主ハ唯命をたすけんとのみ願ひしかハ人々も
毛利輝元も高松の城を救はんとて伯父吉川
駿河守元春小早川左衛門佐隆景をして八ケ国の
兵を備中へむかはしめ人数の程不動の嶽

此軍にて秀吉急に毛利二万余騎をさし
て毛利か云す向られあるその間に川を隔て
輙く戦へき様にもあらねハ堤をつき旧を遶らし
城の八方に水まておしよせてこれへも入す程なき
も筏ともこしらへ出して城を清水ハ来たらす
自害もへし様の外ハ者数すもあらす猶ちかき
へしといひころめして秀吉ゆるし給ひぬ六
月二日の朝筏に但清水もはしめ兄弟党の方
へ近く漕よせ自害の様へて見届候へとよハりさ
腹切てうちぬ亀く定してより堤を切て水減

落たハるをすわゆくさ西騒しく流浪の響きたて
湖水忽つくられて城中ハ大かた兵とそのかさなく
落間もなくしハ城へハ程なく秀吉の勝入もぬ信長公
江州安土に在庄ありしか秀吉使を進て備中の事
よてれすとりきれたされ信長自迎を御出としよて
然るに城候されかぬ六月中に汝太郎信忠と具して都に
より三条本能寺に御座しける処に惟任日向守
光秀丹波国にありて亀山といふ所にありけるか
信長に恨ありけるや討へきと企て日をきらしてさ
かくしに軍勢かりそめありて六月朔日の夜

ましり兵ともを進め大江の坂を越ゆく二日の暁
に本能寺なる御やかたをとりかこみ責しにあはこの武士とも
く房氏一手をかけてはやくさうりぬれは防て戦て自害
しぬるに其子とものけとも一族ともに弟なる信忠は
妙覚寺といふ寺にて御座ありしか信長公自害ありて
しときゝて明知か家人もまゐりしに此所にては防ぎ
かたしとて二十日さかしく宮を親王二条の御所にて
御事ともなくかへしまゐらせて親王をは御こし
にて内へおくらせ信忠二条の御所にて梅をおもひ
信長公と本能寺一所にてうたれける者ともは家のうち

明知か方より来て織田の兵を築地一手討
ちりぬ明知か兵の嵩は卆それぬ其天地をうごかす信
忠公の徳しれる惟一ゆかしき人は鈍くに従はず寄
信長公自害ありと聞て御内人鷹司を首をもて
よりからよしたる紺ゆりて八幡のかたへ逃けるをも
や掌をさして明らかにこの事かなうこせぬ事あれは今は昔を
忘れたれと此ひとつのことをもよし聞かせむ人々も理りなり
人ゝし明知日向守光秀ハ美濃国太波郡明
知といふ里にうまれ昔は土岐か一門とかやいひ
しを臣しくつかへて後は天下の人とも持なる

越前にまかりしかは人あつかひにてこもりけるを信長よ
りはんのまけいりをしけるに江州志賀郡を坂
本といふ所に城郭をかまへて天正六年九月にや
丹波へ越て宇津といふ国人を討亡し其後を
とらせ桑田船井を給はりて明智と名乗し其後
あさくらといひけるものにて信長を討し事
謀心逆臣をこゝろとし君を君とも思はす信長を謀叛しける
すなはち洛中にて天下をうばひ信長をほろぼしてみつからたち
よしなり城国をあらそひて亡されたり
人をまもるの理にかなへる事なるへし

恵とは彼かもとに至てそのほかへまかりけるを織田三七信
孝を四国へ渡されしと丹羽五郎左衛門長秀織田七兵衛
尉信澄は光秀かむこなれは先摂津国大坂にて
城ありけるを信澄はこれ光秀にくみして
丹羽長秀と七兵衛は信長の甥なるにうらみありとて又五郎
左衛門長秀もろともに討てけり
無事にてありけれは青山知久同じく
やってきたりけるを見て丹羽長秀二人信
孝は山崎まで出張して六月十三日光秀とたゝかひて
進め七兵衛を討亡しけれは六月二日の秋又反逆

又信長の訃を聞て自害し給ひぬと秀吉は
陣にありしか此先毛利家と和平を請侍りぬ
まして秀吉用ありしかはいそき和を合明
知光秀を討んとおほし給ひけれは毛利家より
使小寺良高と云者を京より人来りぬとて
いひしかは毛利家に平をたのみ悔しと越て
とくとく帰りしと宣ふも小寺はさも毛利家より
陣を出てゆくとひろひ侍りぬ信長自
害といふも毛利家もはるかにやすく
国にもいましく誓紙をとりてさりしとなり

さて六月六日秀吉播磨に帰り給ふ尼崎の川
辺にて浅瀬ありしをわたりてその夜は姫路
に着給ふ軍兵をそろへ光秀を討んとて
おほく九日姫路を立て都へ打のほり給ふ光
秀は殺されしにや同十二日摂津国尼崎
に来り給ひぬ光秀は秀吉備中の軍を平けて
のほりぬときゝてあはて淀の城より川を越
勝竜寺の東に軍をそなへ同十三日未明より神
の前に備を立山崎より向ふ川を渡る山右近
秀吉に従ひたりけるか山崎の前にて

寶寺を本くして軍をかへして明智か陣へ向ふ秀
吉のせん陣加はりしかハいまた戦ハさるに秀吉まん
まさ加藤ら江旗ひ進て山崎の前の田川浦
ちかきよはるにあらそひて後へまハりけんやう
進行ハ明智か勢ハしるとつきまはれしとはかりさ
みしけり中川高山らも進て掛ると見れハ明智
か勢はとてはかれとけハ御牧三左衛門すゝむ
場に討死しけれハ我らはしけ落行けれハ丹波
路へ我悟をすゝめてよ落行のは進掛く討死
数もしられすかくて明智光秀軍破れ給ひとりたく

あわたち城へとはりもとさしまてつきにけり伏
見のりしらいかりしかるともすきかはちと大
男して城を給せ坂本をさして落行けるか小
人通て入道ハ其のつよふとのかとむらやと路を失て
御身の方ハ月大亀谷を掛て山中にて右男と人
めさと推勒修ちるたる小栗栖を廻りしに隠伏
もの共打ちしつて秋更るの夜なるハ竹の株にも
落人よとしてあるかいさ右男云んとて人をあつめ
なしもいはふかるか水無月十三日の夜は
中ねまといふくありてこゝろに当つて宮かなし

の細き路に垣ありしにつきて行る程明智光秀
が脇にあたりぬされどもさらぬ体にて掛通りて
三町計ゆきて里人も聞つけてあつまりけるに落
けり従ひし者立よりこれはいかにといへば里人の中
の野伏のいへるやうつきあさましき御ありさまと
いひし野伏も程なく跡を追ひ来て思ひよらぬ程に
光秀も今ハ命も危き根ありともおもひ首を切て
敵と源くかゝるをひしして絶入りけるを
溝尾しいひしよ従ひ首を切て帯あまるの詠後
又包道より一町ばかりの深き藪の中に隠し置て退り

こそし死たる人の見知つきあまりて務めしてなれば
つまびらかならずして後みるのハともにわびしくぞ落
行けり青龍寺のかたへ明智城ハ光秀ぬまし居住しける
あまり落行けるも敵兵隊をあひくるとまぼりてあけれ
捕ける者もありて生捕られし明智左馬之助
そのぬ程に城を出で投られとおもひてうしなんと
みな国中にいひあれハさて明智左馬之助
ありとしくたゝむ坂本にて聞ゆりて軍兵に
西へといてき明知弥平次ハ安土の城にありし
か秀吉西国より登りて山崎にて合戦して軍下す

向ふ事なく此城もらん事すましくもなし光秀と一家
にしてハ志ゆるとて十三日あまたを立て山崎へと
落し給ふ堀久太郎を軍の先にて高槻へ進み
小大津打出の浜にて左馬之助小舟にて向ひ来
鉾戈交て戦左馬次か兵おほく討まけけれハ
とて左馬之助八十余騎計を引具して湖水の汀を
掛抜て坂本の城へ入此十四日秀吉三井寺へ入給ふ
明智ハ妻明智か妻子人々首切て天守にてはたしけり
又小栗栖の里人明智光秀か首をもちきたりて
出して回船へいと白里人にわかに出し落人

ありやと方々見出して殺しけるまゝにて首をとり見
給ひぬ摂津守みし掘いそき見れハ人々あつまりて
そひ枝を見けれハ竹の中より見知りたるもの立て光
秀ハしといひていそき掘来ぬれハ吾か秀吉まいりて
光秀ハ信長を討し報をや来りしと杖を持て首を
うち給ひ坂本の孫十郎ハ坂本の城に入あまりよる随ふ
る者ハみな子をのこさす落けれハ城をとるに
捨まゝにあらん光秀か子自殺といふを見し天守
又其外敵四方より追付ぬれハ自殺をとけ殺して天
守に火をかけ焼ありて腹切て失けれハ弁蔵門就

物て明知か二万あまり軍場をはなれまし江西
うこ田か井貝としてうたれのこと兆て身ひとつくらん
とせしを井貝撰て秀吉へ気かせたり龍秀ら
ひくなとりしか首を縫して家来田口に張付けりせ
らまし内蔵助も是をさうこゝろはりて弦之条ともらん蔵
書にあまり明知ハ氏を帷組り後にも明知とは
承事ハ人みな志はくあてとしらさんとす
之丸首切もおそれ自死ハされけるのあるる故ら
除て其明六の新後ハ七月らちまし那とてもう番
例の人かくせうるへし秀吉坂本よの兵は数案

江州志賀へハ越後守ハ此所ハけしからす明知か子まし はなち
てまかせ手もいまさる儀なしとうたらそ色々あらん
後藤へ行を承り候者とも妻子をさめかりをかし
信長をうちまいらせ後藤之人ハ家来にも献来るへし
引とも討隊との者ハ備中より越ぬ年老たる者
あまりあかく諸としても城へ出ぬ横に戻りおそれて
唯身をかくしてもすてもよしとて伊吹の麓広徳
寺云山の奥くにけ迷て横田ひゆるへしおさなく
又髪ゆく横浜あまとおあるらその者つく成
弁郷山中して云ふ小兵衛太郎と云ふ武士もと明知

まく公さしあつかれて信長らしられ引退へしかは
上方勢も去濃州城々へ蜂来ぬ秀吉のとうく
みな落失ぬましく家々の諸兵蜂起きての
さうらく帰り秀吉明和に勝て長濱に出張
しぬと岸我様すてけいしとやさひろく城と出
坂本貝津の邊小舟をよ寄得らぬす公さし湖
水の汀に出舟に取りくとさしと思へ退来て首
を切秀吉に献りぬ長濱に二日逗留ありて尾
張へ出て趣給ひ彼国は信長生ましぬれは名あれて
清洲に城を築し長谷川か父にもうしを移へし

おさんさ子達を家々集めて居給へ也此時に廃
去る池田勝入か子も同尾張国にあり森田修理
勝家も佐々陸奥守も越中国にありしもしくんと
て彼是に打は越越後の堺小津といふ城に國の兵
らそこりり越後の勢とも様と加へてあつらしは
きこみもく戦しに城中まくしきに秋成清ぬましは
命成物城をもら出取り越後ありてと趣く色し
やとしさ夜に信長を害し引へをも着くれんにそ
前越前を打帰り既に京へ上趣しに秀吉が知
と討て尾張に至ぬと生て同尾張国に趣給ひ清洲

又丹后討向しけるか此ほとに国の様をも定め
つしとて城を取信忠の息三法師を信長の跡
継として柴田か勝とは三か信雄美濃をとこそ
信孝かく定て各国を知んとて例のくさされ
て柴田勝家は兵をあつめし秀吉を討んとし
ひそかに出立て遠江越前より江北へ
の後日をとして兵を出し長松と云所に一夜の陣
夜をとけて安土を越し長浜の城にて討んと柴田
勝家は越前へ帰らんとしけるに長浜の際近く逃れ
とかのしと云ける秀吉は美濃の大垣と云

所をも通ひて通りて浜さかりけれは秀吉来て討へ
きいつれなりしかともえ越す候へし柴田か川
なくは長子次九をとかくらん思ひしとて出し候へ
て勝家は岐阜の城を攻めて木の目まて具して
越前へ帰りし秀吉も上洛し候へり

豊鑑巻二

袖露

同十月十五日比わ信長公のなきあとのわさとて
るまん事と秀吉催しあまさせ給まつり思ひて
読しゐちをも紫の小紫野はなほ様に信雄信
孝ハ云に及はす柴田勝家池田なとを始めとも
よろしきものつかさとりしは秀吉なく執行始
姻営る美をよくつかひ給ふへしとて蓮台野廿日よ
て御わさ始まりて根画し給ふ十刹の
僧とも請してとさまけ諷経誦経なと十日あまりまん聴聞

の道にいれ御ゆるし始り蓮臺野に火葬をいとなむ
ことさらいかめしく作りなされ竹垣をゆひ
めくらし大徳寺より蓮臺野まて道のあひたはきひしく
武士ともをかためおかれ其月養法院秀長卿をとなを
も棺槨のまへをしたひ金繡ならひに玉をはめられて
とりまかせりかくれさせしかは池田古新政とて次丸
ふたりのひかく秀吉公をはしめ鎖龕怡雲大和尚
掛真玉仲大和尚奠湯明叔大和尚奠茶仙岳大和
尚取骨竹間大和尚秉炬咲嶺和尚大禅師其偈曰
四十九年夢一場　威名説作麼存亡
請看火裡烏曇鉢　吹作梅花遍界香
後日其器を大繍につゝみおさめてそ
ものみなあはれゆく人影やなにかなる袖の露　蔵孝
名月はけふの野辺の月にあかつきの雲　玄澄流夜 白
おもひのほかなりけれはおもひ絶よとて見るかく　紹巴
昌叱 名残そのみにまよひしてたふれしくも○あはれ哉
なきかな秀吉は山崎寶寺に又城をとゝのへ
へ居給ひてさて其なる事のみにいまさるにや人知る
しめて掛は志給ひなから十一月末つかた三七法孝
美濃国彼手にくたしまたひ日本を合はせしめむとて

柴田勝家と心を一にして秀吉を亡さんとおも
ひけれハ秀吉是をさとりて先其を催し美濃国の
岐阜をさしせめ城ニ攻寄り信孝をおひ出し柴
田ハ越前のやまなかにて秀吉ニ攻られて人民をも
殺されけり其兵ハおほく亡されけれハ秀吉ハやかて
戦ましはなし次第を感つきまして人数乃信長の
御子なれとも人子たる此上よりハ家の
はしめは罪なきとなり田を寄の人質をとり
ましく覚えと思ひ年に家の為天正十一年に
長秀吉は摂国の白粉の是ハ瀧川左近

信長にそむき遂に勢州をせめ長嶋ニ立て家の
城々を持へおへしかと秀吉ハ責入りてハされハ討ん
と国の是をにてそ康路をもて亀山の城又瀧川か
見きさ籠りけると同の中ニ責落しておまえ頭
城を攻ておりやみて城を攻けるに和田の城の援
よく云るへきなりけれハ安く城をさかすして討
て行ける所と云ふ長嶋城を通りてせめかは
程瀬と信孝をハ年をおひて城を落ちぬ
うきし程に勢もつくりての事になり一道れ
然るに柴田勝家は其間に年を軍して

せらし依之かせん城おさへの勢を出して江北の陣中
陣内に軍を定らしむ伊勢国の軍を発し出
江北より越路に至る所は山深くして雪深く
皆小競ありて敵も味方も相しかけ合ふこと
柘もおのれが陣を堅くして未だ日成らし
かかる所に美濃より告来りて三七信孝柴田が軍に與
きしと附を得られけるや亡ひ給ひぬ事なとあり
め候しゆべしとて丹羽長秀又無勢
に陣して本谷に陣しとて柴田と相せし秀吉二
万計の勢を具して美濃大垣に趣き三七信孝と

戦在しとて濃州大垣城に至給ふ秀吉もまた
濃州へ越ぬとき其間にかもして軍をせ
もやしと思ひたりけるや佐久間玄蕃尉
久と盛政はまいゑ池山なと具してゐるハ城辰と傳
くよこの海ををきてを廻り中川瀬兵衛高山右近
の陣所を落さんと責戦ふ時川しとや亡ひけん
高山右近ハよ之者引連秀吉の陣所木下へ
落行ぬ中川瀬兵衛清秀ハよく〳〵やむ節度とり名
まつ戦へとも兄弟一陣の者ともみな大勢に
討れけり又今のまゝ本丸陣に引取

りくりんけると云ふもの法りましぬるりや引追
き余呉海の汀に嫁とくとめつ木下木大垣へ
早馬をとうせ東のしりと些ぬ告しらせ
秀吉此のよし聞て木下ハ掛らせよとやる
とりともやめ具をも法らせさわりくハ石かく
よくも死たら事もこえいりそのけ成のさ
うは木下よ見えけれ佐久間か兄を少て敵のつらさる内
にかれ候てかさし秋いよ上海さうはしよ越こ
柳瀬山退き秀吉ハ田て宮しう候云
ともかるひかりる山の峰へ成とある移りく来り女

ときしく戦ふ福島左衛門大夫まつ敵の頭をとりて
秀吉にありし加藤左馬助同肥後守糟屋内膳平野
遠江脇坂中書石川片桐市正七人先かけして進て
敵をうちとり名をあらはし申ける物そとりく
討とりし中ゟ勝家方と云ひくく追掛頭をと
取申ハ手人に及へり勝家ハ柳瀬の陣所柳瀬に
村それ同しく軍の体をきいてありしか先陣云
尾張原へ越てしけ一戦もなくやと云けれ共愛
勝家とも云しかし軍云やる勢て先ゟ戦すみ
とも勝へきとは敵小勢なるとさせ給わん

よの也城にて御自害ありて後とかくさをありて
急き某於尚く御名をあらし討死をし
と志きりよいさめられ人寔にやむ也なんとえん
して盛政か免受柴田か志を金菊をす
よきこへいを取て我とへしたそて獻をまいり
那ほ来下方の小川と佐すみ來れハ柴田勝家と
をお主也て後我ひ小川かへきまし討まし漢
の紀信ハ栄陽にて高祖に替り主命なと失ひ我
國の佐藤忠信とて義経の爲に吉野にて討死
そあめんしやうえさせ是に同しと人ほ見けれ

なりしまかわ越前まて入て北の庄の城をとら
らむとす戦りん笠もあらまくれて勝家共をもて
おかお大と掛自害しけ漁居と云ふ法師城
中に独まうてめ腹切らせにかわ佐久間と玄蕃ハ軍
破てわか年にありして我しりをとへ加賀の尾山
の城に帰らんと出しハ山中にて甥なて世に行り山
儀しもおやしめ搦て秀吉へしまふ柴田息
権六をそうしめ来りぬともに越小松宇治河の
邊にて頭を切るハ柴田伊賀守勝家の為に
は妻子なりしかともむ死くて秀吉のもとへ合し

事はかくとはかりしまゝに勝家甥なりける佐久
間玄蕃加賀の二郡を知て尾山の城にありけれ
ば留守をまもりけるか佐久間盛政とて
此よし聞て馳ゆくみなおもひし武勇ある者共
表裏気をたしとて一揆の党を集りあつて存分
わりけ掃来なれは勝家殊に先へ玄蕃に語し
なく保賀にゐあのぼりて我なのることあれ
む庵こそと玄蕃は是まて出れともとも袖を取て
引とゝむる所あまた是をきこしめけれハ勝家を
たのむおもひは玄蕃の事に於ての仕置をたのまれける

我の存よく居たりきされいよく二人ある事あれ
よりしは役にたてて上りてしかんを以てこそ勝家と申す
ものとふらんされ共又なるまし人を存れ罷るもの
とはおもひは勝家と子を添まゐりて甥をもそれ
はつくるものひて罷たるものや盃一つそれの根
ずり勝家軍に負色めるを見て人をも人
を添しくるしきんもつとも存めして秋はまなは
秀吉加勢して尾山にて玄蕃前田筑前守
利家とともに是をもこれたる八月まで内へ存て
かくしても昔うれはしき添なり内秀

吉有なさしと通しけれハ也丹羽越前守長秀
若狭國よおもむきを越前加賀二郡を添て越前
ちしきしてうつし給ふ秀吉小國をとへつく但並て
美濃國よ於ゐて丸城をとらしむ三七信孝ハ岐阜を
しそ給ハ給ひしにしハ岸本ハ根をとられ
しぬまて家従ともみな落て失日次郎ハ深
うわしめの計ひ里ふまいらす三丹信雄尾張乃
勢ハ彼是しそ城をとらみ給ひぬ彼をとらしむ
かし尾張のうちて御座をまとらはわ給へ天
珠を出川并てまて知國の守津典小御座

すまも信雄のとさ中川勘右衛門をつけて自宮
し給ひとおもししく色らくしそとしみひしもて
出川よる掌がもちをしめをまつしらし刀のを
いそかき合自宮けりつわ勢小瀧川左近将監
味方亡ぬるうへはきんとさまて秀吉ハらう
し給越前の國大将とえ二郎くり乃札板なさす
まセ長滝乃城をハ信雄知給ひけれハ秀吉をと
たれハをさとも軍ハさ湖おりし猶とも
丸郡しかおきおへ給ひけれらくし森まさん
く次出崎を経へき滋よおもんと思ひ給ひ

されハ摂津国大坂ハ地も要害よく西国舟
の出入の便能ことも遠からされハ家をうつし候所
と定め城をかまへ居所とひさしくなさしめ給ひしより
給ふに此年秋より人々に仰つけ給ひしかとも
て給ふある人これ
此ときひとよかくひあり給さまをすゝめハ今を限り江に出給ひもなし
給ふれとも天下のまつりことも給ひよりけれハ十一年に至り
織田信雄松平家とかたらひ秀吉とたゝかんと催しける家にハ
新田義重の末孫にて三河国松平と云所にありける祖父清康ハ源
三河国にて世にすくれたる家にて武士のほまれ
あまた給ふをもつて後にハ日本の政を
とり後に治知太政大臣にてあり代々子孫の
おほえをもつてのちも遠江駿河甲
斐国と三河に加て四ケ国を知遠江浜松に住
給ふ信雄是をたのみ給ひよりて人すり
し給ふに池田勝入摂津守にておもしろからす
義信のうち信しとてひ給ふに始ハ秀吉
にしたかひ給ふとなんかはりて岩田のと云る
ハ信雄にもさからひ秀吉にたちを通りしかれハ
かまへとせん殺しけんとおもひ給ひ長湫の城に

してさし殺し給ひて津河玄蕃浅井多
宮丸二人ハ岡田氏によしみをかよはせ内附に失
しとて討けり此後ハ秀吉へ若事引し[illegible]
信長公の御子ながらひ軍を起さるゝ事ハ
ねと是非なく合せ給ひけんをいふとハ徳川
して云ともなを従しいまた尾張と越前
給ふ池田勝入父子並て美濃にありしが
軍なりしに秀吉にまたく美濃の給
故先小池田家老なる渡りありて犬山城を攻
ふよその時犬山に信雄なる中川勘右衛門あり

城をまもりしか鳴海にいつきにて前て居たりし
ふ和山に御らんとする道のほとりにて池尻平左
衛門尉といふものゝあるをとらへてまつ安
うちひまを失ひて直つきとしつて出てり
まか此折なりしに池田氏渡舟を求め川を越て
城をやぶしかはぬ森武蔵守といふハ池田勝入か
聟なりしか東美濃ニ郡なり金山といふ所
にありしか池田犬山の城にうつりぬときゝて兵
をひき具して入らんとて多くの軍をして
なし給ふ家康ハ四国の兵を具して尾

給ふ又信雄の人々もありけるにはよせらるゝ武
蔵か陣を破らんとし武蔵守は軍か岩崎の者
あまたいとく戦ふといへども兵すくなかりしかば
叶ずして金山城さして引ゆくを追掛らるゝ所に
者数多ありと見る軍勢めきたる信雄家の清
洲よりかけつけられ秀吉兵を大勢具して
打せ下の犬山城より出て蟹城を攻させまゝ
しらく勢く川を越て軍しくせんとしける
処に偏に池田勝入が首をはやしらる故なれば
とらんと掛りて楽田の城によらんとて陣よ

其所に先掛の勢をもつて陣所を定め給ふ信雄
家も又こゝにそれ山へ出て軍しくすとも
千余町を隔て見る道の長さ四月十日秀吉
の方の池田勝入森武蔵守堀久太郎三好
孫七郎秀次以上二万余騎の勢をもつて三河
の東の山に陣取られ陣を右にて後柏井
よりも三河へ廻らんとて兵を引岩崎
陣の村を破りて城代の頭を切りて云所
に至りしに信雄家の弐万計の勢引具し
て九日の朝より押寄とて攻める勢

七郎秀次よりけれハ又秀次ハ信雄家康に此軍
あるべしとおもひしに思ひの外に弥
其敵ハ来まじはやくてさわぎ様をとゞめて後
り労秀次年ハまだ若かりけれハとて木下勘解由同助
左衛門尉二人をとゞめられける様をとりて北よりさし挨
けしとはからひして貳人ともに討死しけるを秀次
かなしく羽柴堀久太郎秀政に心そへてかけ合せ家
康と戦ひしかども打まけて楽田のかたへぞ引
取りける敵ハ勝に乗て追かけて来まじきとも
せずして又勝入池田勝入森武蔵守が陣まで押寄

田武蔵守が勢は長久手にあつまり居けるに信雄
家康ともに押寄せしバ鉄砲にて打かけられ軍兵
くずれて敗走しける森武蔵守討死す池田
勝入父子も是を見て取合せて下知してありし
かども終に二三十人討れて後敵と戦ひ
ふ永井右近直勝来て勝入を討て首を得つる所
庄九郎元助は父討れぬと聞て取て返し合せて
又安藤帯刀も是を聞つけて戻して討死
紀伊守森武蔵守は鉄砲にあたりて死にけ
死骸をもてかくされし首をとめられたり

又爰にも牧村兵部討ましにうたれて戦かんとす若
武士多く我先にと落しを追掛命をも惜まず
数しらすうちしたかひぬれは惣て茲に刀を
刀も立ざる如くなれともかゝり軍破れぬと秀吉乃
陣へ告けれは後ハ敵軍を引かゝらんとれハ戦ハ利
なくしてもさもありけれは陣代出るの是を体然に
時分まて凌つきぬ信雄家も秀吉もつき武士
なれハ其事有らんと急てさしも急き小幡城より
かつまで引入しかく秀吉さすかにて根なくして田中
といふ村にその夜ハ宿りて明る十日かくて大の陣

又去程に池田武蔵討まじめれし秀吉大勢
なれ共一先是をもとゞめ生に陣を堅し此城追り
かりしを四月廿一日の大山の本中なる奈良高田へ
清代村より城をとりまき丹羽長谷川蒲生稲葉
本多を置とくるしき七月朔日秘にや秀吉
六万余騎の勢ハにて北畠家へいつ
かんくに軍地仕として二重堀のうちかい
とり掛家りとく牧村常陸養子田中氏小寺
官兵衛石山道とに武者二手堀と門追つれ
を敵ことくうたれしを細川成申ことさる所

与市といふ者進み合てかゝへて滑川秀吉の家
臣よりも見おろしてうんし給へさらく軍兵備へ
小口入にしてなお山よりいろ給へ手をはれくれは養子
羽柴秀長は秀吉の弟なりしと今朝二度城誌させ
ひまゆるめるを思ひて討はかるてもいひかなひ
くやんとあると宣ひしを勝家のまれて候ともいひ
かたく候ともへたるを恐れて候はゝ秀吉公の御先へ渋
我とともみ来し侍十人かくてさすれは色々して後
まゆるをしよなんそらくはいふそとなれはもとより
してかりし給ひしか程よりし寄り候はれかゝちてん

の事には又羽柴筑前守は大山より加藤遠江守と
おしして城を守らせ門をは越て兼て深くり帰り給ふ
かくし九両より南へ軍兵とやらしてその日をおもへる
に陣をとらし給へ先勢して井乃城へ寄てよかりて
ぬ守り若ともに和をよろかいもしさうしひかりをる
ほらく敵そみかしもありすれはよのそてありし
みのうらぬ先に旗あらはすしもかくしく旗引け
ことこしめる者ともも先をはやて遁掛しにまいらしれ半
く旗延かはたけの寄れは城へ寄らとしたる
城かくて広めさて又北は城のまはりを沼川めくる

迎つきりしいふておらんとて又秀吉備中高松
れしろをせめとて責んやとて城のまはり三十余
丁に高く堤を築あらせきとめけしかば様すく湖
水と成て城ハうかぶ鴎のごとし大木にものごとく
ときてたゞより居経なく為且ち門をうちなんとみて
しかいふ志てわりん大和国筒井順慶ら陣所の
前堤崩落終水ハ高し川のみなもと落しく
一般れ中よりいきつきてはの地ともなりより
籠し敵とははやくて又水ハてつ一んとまず敵軍
城を取残源六又子城を取ちてさし尾張に到

趣し命にみすけ給ひて和をとらひけるハ此上我
はまゝせ城を渡し皆兵供いとりんろ首治かの覚
思給ひんとて美濃国大垣よ至て給ひ然則
當丈右瀬川尼近尾張乃ゝ江の城ふりて里数
あまし從あるま瀬川いまし争馬勝ちり越ゑ
十五ふ一とのふせしうて引給てあけしら軍より
岩河る其なりましくとく秀吉まひあつて保勝
高津高まてゝるる尾張ゝ江といふ所に
望の者秀吉に定さししら勇れて瀬川が地へ
越有て極わゝられ着とり僎し軍の手まく

はなすへきとひしめきひしめきけれハ滝川おちんとを
むかへんとして白子の浦より舟にのり家忠とも
集家忠ひやうに東海くちより江の城に越へく
滝川家のる舟ハさりあすく見ぬ様乃舟鉄砲玉
兼をも入けるといへとも志ふかりしかハ江城川口まて
漕よせてとりことになすへきを
しけるハ蟹江の城ハ織田信雄家一にて九鬼よりし
告られて驚きあひてるれ共ときをつくり
ふかくうち掛けるをとしかへとも
きぬ滝川ハ蟹城に取入ける体さる事にて敵

ちかや来て木戸を破らんとす滝川かたへさし白旗
たたかいつ敵ハ鉄炮をうちかけ木戸を打やふりせめぬその後
よりはちかく敵よせさりけれとも川口まてひし
舟ともハむなしく陸地よりせめまし兵も粮も
なくして叶ひかたしとおもひつゝ滝川偽りて和をこ
ひけれハ江城を明わたして敵にあたへ舟に
かわ舟に取乗て伊勢へ入りしかハ川より
やかてひし家に登て丹波守とそあり
けり秀吉滝川をとかくりんして大垣にいとゝ深
掾小知行せしむ滝川ちやく城をたのみたまハれ

かすしせましより京にゆき給はぬ家もなしに江
の軍勢あまたきこ江けれハ帰り給ひぬ此文月も色
秋も漸くすきゆくほとに秀吉又伊勢の
北畠殿ハ柴名が西に北山へ越おかり陣にて給
まへ柴名は見下して軍兵をしたまて志給
ふ信雄も偽柴名又此うへハ給ふ秀吉けれと
信長のとさまりし當田尼通津田集人あ合を
付て信長の画を書いうゝしにハ源きよといよ
しへまも定きら従者の我滴知光秀を討く信
長にて親戚いうとやめ者他流称を清せり出ゝ

ゆにあうさましとも殊いうゝしと又及うきし信雄
を始まり信長の法をうはいらそのあ給へはき給
いん我をとりうらして頃人みり給いんとし給へるハ
力なく甘軍をとたせり早く我をあきらこそあり給一
賀平をとなし對面し給いんやと家ふ歌なると許
給へハ當田津田源をとなりしりょさそおほしめしるよ
ゆかんはうた信雄はれしく給むうひ御むは中
我も迷へやと為おるさましく柴名又立さらくか
うしとか人合ゆまさハ信雄ゝ我もしくてらあり平を
なさいやとの給へて両人立帰り秀吉又昔日我

滿足事ありて次日叢名は南乃河原にて出語
へ之信雄これをまねき御前に召して對面ありて秀吉
ひさを折て手をつきて詞を出さずして涙をとゞめ兼
給ひし也秘藏せし指しゝ刀を進上しおなじく渡
又陣のうちにて酒宴ありて軍勢平和なることをうち悦び
あへり尾州犬山の城をはもとのことく信雄にしらしめ
し玉ふ秀吉は是より坂本へ帰陣ありて秀吉信長
の臣として信雄に對してかくのことく事
その罷深し信雄父のかたきを討し秀吉を元
さんとして事義にたかへしへし是仕いりあ

業をつくさしや是なりやかくてかくて後その後乃此
秀吉は富田左近と津田隼人を松平家康へ遣し
元来家康は遠慮よりおこりて信雄に頼まれ
平和をなしかるへくハ和談のため上洛し給ふ由
申かくて此合へしと云やり給ふ家康ハ秀吉の備
をおもんしく上洛すへしと言ひぬましと家康ことも
さる事おはしき秀吉は世事に給ひてられたまふ
すてに官位とまかりにて家康に下りしと同し振つか
されは家康も此の義に同しうきてまゝに富田
左近津田は又遣されかさねて秀吉のたまひく

我とうとのひ給ふ事ハよろしからし母上大政所
を質にくだしまして遠江より給ふ家康も
此うへはとて上洛有て成人に成りて聖堂に給ひ
又やう秀吉公嗣国なりて二なくのそれなりし給ふ家と
て定まられる害ちまりされハ秀吉公の妹を娶らせ給ひ
またいよいよ隔なかるへきと仰て胡乱なく給合す
し給ひけるの同年月廿日子姫嗣を弁ぜられて
しかるにいかなるわざの様にいきん限りありて
そらひくたるいふ事を龍しけるは給はる殿に
まかりしめてまつりけんかやうなる伊勢屋法家康遠江

小法道よくよくありかわしたまへん浦里なりとくと申候
海へ出けるに入大鵜きの鶴まて謁りてなすやりの
ありしもまうん家なし会ずしや肉にありとあららさ
うこえもやらしゆきしに火すしてさて焼死しけ
婦ことも義ならさる中にたち絶えてさりけんはわさ
わひよろひて國く異く命を失ふ者際限なし
目やし常なる事いなしのまもる出る二月また
地の事出りさしきかかりあるまじかかりて起りるさ
大地震たかるもとさまし見けるとおもわしくしも
うしれ見に出たちてらるしく焼きしハかりしり

吹上濵

天正十三年の春秀吉軍を紀伊国に遣されけるに
先に尾張にて戦ひ給ひし折から根来の門徒
紀伊の国の雑賀の者ともかたらひ合和泉の国へ打出て
岸和田の城に取かけ人のはかりことにこそやふれし
中村式部少輔と戦ひ尾張にて手負けるか其
事をいつも安からす思はれけん雑賀を攻給ふ
さしも堅固なる根来法師の寺しるしなく
いかゝやとて堀尾帯刀吉晴に申付給ひ
将にさしむけ責給ひしを五百余人

の首を切りけり此時これを聞ておそれ城ともみな
ひらきておちゆく小落ともみな三月廿二日秀吉根
来寺に入らせ給ひて寺ゝをはらひ焼給ひけり
ありしを見て其所に下知し給ひて堂塔をもことく
みなやきはらひ給ひ中村刑部少輔に
何れの寺をも残すな申付られける
見物の人々も悲しひ給ひけり
其後雑賀の者ともかたく守りけれは
家村殿を初めてみな寺にこもりけれとも
いさゝか秀吉治まりし後掛られて

うへの山へりあらぬ勢多明日の夜のといりまて
りしあひらうらん上人いとれうら大僧法流
針をれらうしあすり此附に川をともに焼き宿
里ありく数日去りしとつく所なうつき給ひ其も
と太田村といふ所よさりしむけ膝と加へみ給府
九中よせめなとさは花をつくつる色しつて例
是非貴かりし給ふ城のこるをなてうつ境と桑
まつし歎れ出さら植え和よ志つさと由ひまいせ
里その次第よたく見えぬれも浦くのわら舟るる入
てうくへをうる二筋をたまうて四方するよと

伏地と打掛中にひさし今歳行ともて
あとらふまよ即施りしすもさつさそいり
へ九川乃ちうれの所境崩く湖ゑ凡とくゑ子
可し水附のままう乃け里又しだ水とそそえ
ましそ崩し家を藥調んともし社よ城わ和俣
ならとあひ久れとも城乃長なる者つさく四五人
出宮をせ族者なとし申出し給へり紀伊ゑ面
志こうひくら和斎至法酒の眺望と見給ひん
しそまうて給ふ也已法師とそやまりつし
の斎にも仕る者志つうひし玉津島も發句よ

神代わたのくすしき玉沫鴎
石景枝棄洲濱冠白波緑樹兮吟呻
靈光磨作玉沫鴎 料得和哥第一神
明也
風ふきて松かせひゝきよするなみのみちもしほかなしき濱
和哥の浦
いにしへの今さへ光れりそらも見るよかひかりそあまの船
夜代りしつゝかて
南北壮観夜代山 径廻石上搔抹回
挙頭満眼海波穏 来與来與不盡還

三の山といふ所に城をかまへ紀州根來の衆と云者
又紀州大坂より海路ひさしかりき七月秀吉公寛向す
成て姫と豊臣小早川隆景に三萬人を長四國へ義
清まる秀長を大将として蜂須賀大蔵黒田友
元清小早川高景よ将軍若渡海し伊州國を長曽
我部元親秀吉の下に長く秀吉に忠をたてかはさん
と思ひけれともゆるしたまひぬ故に四國侍ひとらしき
おもむきを知らせすして阿波國をは蜂須賀
讃岐をは仙石越前守伊予は福島左衛門大夫戸田民部
をもとのまゝ給ひたりその年の秋秀吉越中

出て越路へ彼出ると織田信長公仰く陸奥守
さにありて路へ越後の境ハ浦しかハ城に越後
の国よりわらを堅く守らせけると責たゝ入陸
奥守ハあうて入へきとて柴田修理前田孫右衛あ
をむけ給ふ佐々様に申けりとしみ戦けるに越
中越後の境名もある者ハりき道なりまし八越後
よわ縢後責をけんさわけるを城を利むしひ
く城を渡かりし越後の出て帰ぬれハ信長
公別知らせめ小らられ給ぬと申しける柴田に
越家ある同ハ後も国へ帰ぬ仰く陸奥守越中に

多ありく彼国を守りしぬらへけりも出及ともし
武士とも陸奥守ともひとき軍にありし来付て
ともしほとよも山の城乃道まて軍にとまひ国人
らしりまけ多くうられ軍に発しらおすもとすくて
越中の出語しひ人紀信に志おり秀吉尾張の軍
の折伝雄よん人合を秀吉をむしさられんこく
るをすめ路より加賀国へ入前田氏うへ参の加まへ
と軍の先としてすゝんつゝ乃勢とも越中よりされ
入ぬ仰く氏敵大勢なりまし八所々にして叶りし勢
とふらつましく戦とあらんそいひてりし志不

ふし加賀越中の城ともより出の城ともを攻めて
みなまし山一所によせ集りける秀吉是を御覧ずるに
の山下にありし軍兵ともも越中の陣をはらひ
佐々氏ハ信長のときよりあまたあひなれしか
中々ありし人前田左近丞因幡人数にて防ぐ
手となり越中国にいまて前田氏の大部肥
前田にあつかへきと定め給ひハ國こく前田氏に
給ひし佐々氏ハ具して京へぞ帰りひとかくて
と年も言ふに秀吉にゆるし移りやこれ給ひて
なひそこきこえ人筆前菊のお鳥人の山家もとく

ありくわてに太政大臣近さきの筆者内々なれは
まことは人みな和歌ハよくいふにひく楽ありて七月廿
四日陽光院崩御し給ひて東山泉涌寺にをさめ
まつる同十一月七日帝御位をとゆつりて正親町
院と号し申奉るとかや同日御即位とかや
例の事とも有しと世の下さまよりしらるわさ
なれともさしとききぬよし豊後ハ大友氏義鎮と嶋
吉ヲ使して嶋津義久大隅薩摩日向をもちし人
てありけるか務を豊後はかりとり義家
うましてときくらへよせけひろうし泄付あさを申まれ

たて城給ひりかと合給ひてなうく秀吉にしたかふよ
無しとおもひりぬましくて讃岐国の仙石越
前守よ長宗我部と我部元親とも彼うしめ給ふ国
え去る我部元親も後の府内よむかって大友よ力を加ふ
あるもし程よ霜月末にいたりしたかふとくても
て軍よとよひ戦をけましけるとて大友仙石給ふ
打負て府内の城よに籠りぬるが着多みあ
けり后津ハよく勢とまるひぬその比秀吉公
給へる八条良乃京の大仏を破壊し給ひぬ
よてなやとよろすして東山得長寿院の木小

比形とこ作さ石をさくまのとく仏師のさくと
なり仰よひて盧舎那仏の縁をつくりみさき給ふ
高野乃木食上人をもりの二年の後秋まやと
なりて堂のいろいろそなへかやさき玉のやう
らく風よ志てこうへも儀まつそ作りつくる
すすそ志るへしされといまし七月の大地震よ
仏おもちをうちかへされくとんくさましけ炭
立誘仏をてそよらんめれをたち秀頼
公又いりれよりうまし漸くとふりつくらう
まられ大仏殿にしもんいさて頭の為よ銅のさと

なわめるそ識よしこさされし豈ともに又秀敷
にたらりみのさら由へりけ友八人なれはなかさるき
しさそ秀吉公おゆつり給へる金銀おほく
時役小おこまる人よしよしひのまひけるさて其
東山又御座して人皆あへて猿猴となし
めるもの只かさ同十五年の春秀吉公は島津氏
を退治のへしとて四国中国の勢をそへて
畿内近国の兵を催したりてまさしむとも六く
秀吉公も三月一日都を立られて向る難波の
浦よりもつるへさて舟にのりて下られ金も五

須磨明石をへてあまむちらんへ着もらわけせ
幾門司赤間関をこえ給ひ豊前国におりしへては
豆庫のやのまさへされ秀吉公は府にいたりて
兵を二手に分らる一手へは秀長を大
将として中国の勢豊前豊後八箇を討しめらる
其後は日向をへて薩摩へむかはれ又秀吉
公は畿内の兵義勢を勢揃ありて筑後肥前
をへて薩摩へをもむかんとありしかは地へ軍勢
ありて後日向に境あるたかしろといふ所にとりまき
りしてやかたといふ城をおとしに責戦よ

鍋嶋も後藤もやはりへさしてまはす分てそ
外儀そてあまりおんのこらく鍋嶋兵衛をと大将
として後藤の為く右わか八幡をめくらひとしまて
後藤の為く陣をくりまそうへし宝珠院善祥坊
陣をとしよせ貴賤へ吉祥坊かる人ならし
かつらわれ陣取といひあつら塀かかりよりて侍ぬ
かまそ阿まかうくさわもく黄やわかれす辰の刻
の始頃より已の半過て上く貴賤へ鍋嶋わしむ
勇士なまし合戦かとしさん事をりてう人吉祥坊
をもとけさかまんをあるつ人者まく南無阿弥

武士あらそひてわりしはいかなるや始るへけれと
も鍋嶋後藤に付いて引退く命を失ふひ病をふ
うしける首数をあらためさりけるとまんうまし後より
城するも後藤の使なくして本をうひ城をおきやとし
毎日内国に行とそ申し豊前豊茶筑後の城
岩をいく城なる川内の高彦居しをとめん
あそて先勝丹波お稲蒲生花澤ある荒田肥前ある松浦
よそを清くあちも後する責わくる大志をし防あれ
もはけそてみすあるまはけ矢討る首も見かあけ
つきられより筑前国秋月をへて筑後肥後に赴た

まつ島津よしひさは人々武士よりも我先に
秀吉にまうしこひけれハつゐしけるとそ道にそこは
おさへ肥後のさかひまて薩摩国千代といふ川の際なる
村より軍をとゝめて皆ゐりさまふこれより島津居け
る城の鹿児島といふ所へハ北れ百十里ほとくへさき
をけうこ島津義久にあたへて此時しもの也ひかん
我知家ハ其秀吉まうしてまいりける時なましゐハ薩摩
大隅二ヶ国給りて常に数十あるへしと定あれハ
きいふ命よりもちろん手をなし義久と十代の陣
又末々これを感しかくもありて帰陣をなせし

ぬ肥後の国八代といふ所にまかりて城をきつきてさしおき越
中丸をまてありし佐々陸奥守に給りし熊本并せ
て一城ずつをあたへさせ筑後国ハ毛利輝元の一族
吉川経言に給りける肥前ハ其儘におゐて龍造寺
を知行なるの始より秀吉にまいらせしありけれ是
彼是中に給りしを後ひさしく鍋島といふ者に云下す
筑前事ハ鍋島か吹ともいへるすゝめ也
をりをもよるを筑前ハ小早川隆景に給ハり豊前ハ八幡
大友ハ豊後のあるしにされ給ひ志るし十万石をたまひ
くるに西の海よりも異国まてもなひかせらるへきとそ

るゝ所ハ松原皆多に清くさゝめきこ清く松の風
波の音きこえて涼しハみな月も末なれ共あつさ
をわすれけるに夜に入て松原より出て立す
こよひはとなかむるよりかへりてもすゝしうに秀吉
此ゆふへ御前にて刻如人々よみける十首の題にて読
よしこの月のうちもよみける
夕わたる神の風にもゆふかせの波のおと
川つゝもくやはすゝしき此海の波路よりふく風よといふ
帰るさも川さもえて又ゆふかせにとはなしよゝの夕暮
なを見ても見あかて神風吹そふるうちすゝしき嵐の雲

しみなまゐりてこの里人きたりいへく見て奉る
雲原やまたかよる神の風やすらひ舟に波の沖つ嵐
吹かくれはおもふ所に打はらひけむよりのかけ
まいりしつ月うけ出るまて人々もありけり
ほとりにあり又と此茶の湯の會ありしをる宗易
といふ法師境界津より来る人有しによりて
波雲原の所にてまゐりしあまたの人々秀吉
にて茶をすゝめらる秀吉公も御
入りてとりわけ夜すかひ来し人もなかにしてけり
松原の松の志川をおもふ松の根

ちなくさふね松のさまり極楽のなかのまたらひたなら
まいとほくさる様に見えたる秀吉其日くまかう
て黄泉ともし給すけたち識りゆくさの渡為
りし安く廿日斗筑前にてたちて下向の城へ
り小早川隆景京より武家へ給ひ登り給ひ安
備前衆はいそいにて小野内蔵亮にて濃も同に
て籠を安くする付ける大事にわかに腸をた給ふも
両実にしてかうその軍の役をもし給ひ益祥
坊陣取る吉事をもて羽柴内逃なけれは浅井兵庫を
始としく討とむつるまえも誘ぬかしをはらみて

探るやとゝあ給無くその後尾藤甚内兵衛として秀吉
のかんようまひ淡路の関あてし給へは探あへて
しくてあかりまへ今さらとくなれはたく軍のみ
彼よりかくてしそ前濃守秀長を始め日向の守へ
むけ給れしかれいつれも我むかへ志井てそくえいけき
なく力なく逃討とよとよそなかりし此日向へ趣しくて
同し程に云されハ尾藤をとかうし讃岐国をとるよし
なるら給ひ八然七月十一日播磨より大坂より給ふ
左京よりは勅使給ひてねそつるに秀吉をあへ給ふ
の始より任の中将秀次は城にて議し益らし賜り

秀吉すミ猶ふ一つさ庵作らまほしき猶ひしら秋の
ほとりすんこそとろう地きしハ冬の始に大坂ふおこしなど
下りうつきて聚楽と吉川き住ふ事へ忘ちり
みしと見え千我まさらんと家居をしけりし流らよし
えんうきしけるにハ又都にひゃうさへたらん柳よみちき
ましひあへ家柳あり出ゐるへし冬ゐなわそ筑紫
北陸國よく出入山家の行かしさらふちる者多く陸
奥守をとしけるしたりくらうと常きしハられおとうさ
んとて山家の城より年貢ある折ふし國人の
武士ともへしく陸奥ある山間事討んとてけり

遠て熊本の城よりともに馳向ひ若松の有ける館を
ておりあれハ二三日のうちもへとハ然かもし本丸討て
事あせさ戦ひ聚楽にて陸奥ある山家の将軍とさし置
きせ帰て戦ひしか國人立二萬討とおほさかうりや
陸奥ある山の國人二千計ある勢にて敵の中へ一文字
よりけへ入れハ出人四月よ追ちらさまいらる一万人ほど
ふおそれもとおん陸奥ありしにわすくまいらく開な
る武士あれくなの人々へし私の軍志ある人へうらさら吉を
秀吉公よの志あされきれハ我らの心ち出軍ハあすくて
出よ上へうらへのう京よし聚楽へかへりられの

事まて年を累ぬるに及ふ事十六年にして元日参
吉彦秀武の亭に来て金を具して衣冠を着る事て
供奉せり同月末に陸奥より肥後に登りて居
済りしに其気色ありしかは国人等あやし
みたりしより後も時々軍をおこし家衡に与みし
ありしにはかに又居城りしといふて貞宮さまよれ
より人等任しとあり国人をもていましめ
軍をおこし陸奥の城討んと思しに罪科のゆ
るしを思ひ出して寄を招きよりて肥後の若
ともに伴せしく者かへりて許されて事

肥後国とて加藤を外にて知行としてかへし

日本政府図書

群書類従巻第三百七十九上

国立公文書館
National Archives of Japan